

# 本興寺だより

令和五年

二月

第二四二号

「寒き者の火を得たるが如く、闇に燈火を得たるが如く、此の法華経もかくのごとし。よく衆生の一切の苦悩、一切の病痛を離れ、よく一切の生死の縛(しばり)を解かしめたもう」

(法華経 薬王菩薩本事品第二十三)  
新年も一月が過ぎました。二月三日は節分。四日は立春です。古来は立春は春の始まり、一年の始まりでした。その前日が一年の終わりであり、大晦日ともいえ、今も豆まきなど節分の行事を行う日となっています。

今では少なくなりましたが、以前は家の玄関等に「立春大吉」というお札を掛けていた家がよくありました。一年の災難除けのお札ですが、次のような説話があります。立春大吉の文字は左右対称です。そのためこのお札を玄関に貼っておくと、鬼が入ってきた時に、振り返ると同じように立春大吉と書かれたお札を裏から目にするようになります。鬼は「まだこの家に入っていないのか」と勘違いして逆戻りして、結果として玄関から出て行き、一年を無事に過ごせるというものです。

余談ですが、**おみくじ**等にある**吉**と**凶**。吉は良いこと、大吉は最良。凶は悪いこと、大凶は最悪。とは皆

ります。

大寒から立春にかけては一年で最も寒い時です。これ以上は気温が下がらず、後は階段を上るように、少しずつ気温が上がって春に向かいます。だから春が立つと云います。

私達も、辛い暖心が氷のように冷たく感じられます。そういう時こそ暖かい希望の春の気持ち忘れず立てて生きることが大事なのです。

人は皆いろいろな問題を抱え、克服しながら懸命に生きています。喜びや楽しみはあっても、人生の大半は悩みや心配を抱えながら過ごしています。仏心の時ばかりではありません。心が鬼になることもあります。節分の豆まきは「鬼は外、福は内」が一般的です。豆は生命力が強く疫鬼を祓うことができると信じられていました。

「鬼は外」とは、不幸の原因は自分のせいではなく外(他人や環境)からやってくるという思い込みの気持ちがあります。しかしこの世でも友達でない他人の家に遊びに行かないように、自分の心の中の煩惱が悪鬼や悪魔となって外からの邪鬼の友達を引き寄せたのです。

鬼とは死者の魂を指す意味もあります。鬼籍に入るとは人が亡くなったことです。

鬼門という言葉をよくご存じだと思います。鬼門とは、北東の方位、時間でいえば**丑三つ時**(午前二時～二時半)、季節でいえば**一二月**です。裏鬼門はその反対方向で、南西の方位です。鬼門は鬼が入りし集

知っています。では吉の順位はどうかというとな案外?なのです。  
一般的には**大吉**↓**吉**↓**中吉**↓**小吉**↓**末吉**↓**凶**↓**大凶**の順が多いのですが、中には吉を小吉の後に持つところもあります。

おみくじを一度も引いたことがない人はいないでしょう。おみくじ等を引き当てた吉凶は単なる偶然でしょうか?人は吉が出れば縁起が良いと喜び、凶が出れば縁起が悪いと無視してすぐ忘れてあととは何も考えないことが多いのです。単なるくじだと思つて。しかし自分でくじを引くことは、その時に自己の気が発してそのくじを選ぶのですから、そこには選んだくじを通して教えられる神仏からのメッセージがあると考えた方が良いでしょう。

おみくじは、単に縁起が良い悪いで片づけるのではなく、今後の指針がそこに示されていると捉えるのがよいのです。

「陽極まれば陰が生ず、陰極まれば陽に転ずる」とあります。天地宇宙の真理のように、昼と夜が交互に訪れるように、人生も陰と陽、凶と吉が車輪のようにめぐってきます。

凶だと感じれば、今が一番の踏ん張り時、今が底だからこれからは上向きに必ずなるように頑張ろうと思えばよく、大吉であっても、今が一番良い時、おこらざこつこつと努力して、良い運氣を何かのために蓄えておこうと思えばよいのです。

人の心の持ち方も季節の巡りからの学びが沢山あ



まるゆえに気を付ける場所であると云われます。

桓武天皇が平安京(七九四年)に遷都された時、鬼門除けとして**比叡山延暦寺**を建立されました。また徳川幕府は江戸城の鬼門に**上野寛永寺**を、裏鬼門に芝増上寺を建て、江戸全体の鬼門方位には日光東照宮を建てて両方位を清める意味付けを行っています。

鬼門は魂の通り道でもあるのです。人の一生にはいろいろな目に見える災難や目に見えない厄災があります。厄災の象徴が鬼でもあります。

自分の心に巣くう鬼ヶ島を退治することがまず大事なのです。桃太郎のように外から退治されずに。



日蓮聖人は「厄と申すは人には關節のごとし。人の病いは筋肉より起れば治療し易いが、關節から起れば治療し難いものである。」と云われています。しかし關節の病も早く適切に治療すれば、却って寿命も延びるようになります。諸仏、諸天、神々に認められる生き方をすれば、如何なる厄災に遭遇する危険があつても必ず護られていくのだと説かれています。

節分に煎り豆を撒くように、辛い時でも鬼の心の芽を出さず、怒りの角を抑えていきたいものです。

法華経というお経は、人生の暗闇に灯りを燈して行く先を明るく照らすように、私達が一切の苦悩や病の悩みを超えて力強く生き抜く力と智慧を、この経の中に示していることに気付きなさいと説かれています。

合掌 本興寺住職 中谷 聰 秀